

- ・ 戦前、戦中、戦後を「知っている」特異な世代です。私の年代の10歳上から5才下あたりまで。
- ・ 8月15日に終戦になって、2学期から激変した。
- ・ 教科書の、天皇、国家主義的な部分を、生徒に自分で黒く塗りつぶさせた。強烈な経験。
- ・ 「社会の価値観はこのように簡単に変わる」ということを身にしみて感じた。
- ・ これを機に、いろんなものが「絶対ではない」んだ、と、ものごとが相対化された。
- ・ なんでも、絶対は無い、と、疑ってかかる姿勢になった。

- ・ 大学ではインターナショナルスタイル、モダニズムを学んだが、信じない体質だったので。ハスに構えていた。
- ・ CIAMが、team10ら若手からの批判に耐えられずに1959年に解体された。
- ・ 生家は地主階級。小作人に任せて作らせていたが、ある日突然進駐軍によって強制的にただ同然で売り渡された。
- ・ しかしこれがなかったら社会主義革命が起きて、難しい国になったかもしれない。
- ・ 土地や財産はいつなくなるかわからないが、頭の中身は取り上げようがない！

- ・ 電気、機械に傾倒して、モーターやトランスを自作、電気機関車を作って走らせたり。
- ・ 放送設備を自作する中学の先生にあこがれたが、あるとき先生が「めんどくそうてたまらん！」と言うのを聞いて、なんだか目が覚めた。
- ・ 確かにこれは有限な世界だと感じた。もっと面白い世界があるのかなど。開放された。

- ・ 田舎の学校から土佐高に編入、追いつこうと頑張って、追いついた頃に目標見失った。
- ・ ある種超然と、哲学的な疑問について考え始めた。
- ・ チャップリンの映画、ライムライトでバレリーナに語る言葉、自分の悩みと重なった。
- ・ 哲学への傾倒を、同級生からは受験からの逃げだといわれたが・・・京大、早稲田とも二年連続だめで、日大へ。
- ・ 当時の日大の構造関係は先端をいていた。
- ・ 高校、大学とも、授業中にちゃんと勉強するのが一番効率がよいというスタイルだった。
- ・ 市浦での6年間ののち1965年に帰高。オリンピックの翌年。体調を崩して。

- ・ 職人は、甘い相手ではない。馬鹿にされるような設計はしたくない。ごまかされてわからないようでは・・・。
- ・ 漂白より生成り。漂白してから茶に染める人もいるが・・・。
- ・ 競争はよくない。表具屋さんは一社指名にしている。

- ・ 昔から設計監理料は 10%もらっていた。当時の建築士会の会長は 2%と言っていたが。
 - ・ 10%ではとてもオートクチュールにはできない。10%でできる範囲でやるということ。
 - ・ 自分で事務所を始めてからは残業も徹夜もしたことがない。
 - ・ 仕事は、不足気味の時期もあったが、あった。
 - ・ 唯一オイルショックのあと半年間は、なかった。
-
- ・ 1975 年たるみの住宅、三五角間伐材で。この記事の文章を読んだ作家、倉橋由美子さん（土佐高の同級生）に「文章家ね」といわれてうれしかった。
 - ・ 映画好きの母親がライトがモデルと言われる「摩天楼」をみて「建築家はどうか」と。
 - ・ 設計と違ってしまったビルを爆破して・・・。
-
- ・ 家業と建築を両方やっていた。
 - ・ 当時から、建築を、「純粹で、美的で、哲学的な営み」としたいと思いつけている。
-
- ・ 自然農法の福岡正信の本を読んだ。ある種の啓示・・・。
 - ・ 耕さず、草をとらず、消毒しない。←建築もかくありたい。
 - ・ 植物同士を戦わせる。クローバーで雑草を制御？蒔くことと刈り取ることしかしない。
-
- ・ 形態は機能に生かされる。美しいものには機能がある。機能も有限である。
 - ・ 建築は、追随しない。そういうあり方を模索した。
 - ・ 着物と洋服の違い。着物は体型をえらばない。
 - ・ 人の機能に歩み寄りすぎると、先割れスプーンにいたる。
 - ・ 機能に追随したものをいたずらに作らないことだ。間に住む？使う？関係性？
 - ・ こどもが二本の箸を使いこなせるようになるまで、目を細めて待つ。
 - ・ そのような人とモノの関係、そのほうが永続性がある。
-
- ・ なんともない家がよい。
 - ・ 一輪の花を活ける、その活け方で多様性が生まれる。
 - ・ 違い棚を作れば固定的になりすぎる。
 - ・ ちゃんとしたものをつくるにはしっかり計算しないと。
 - ・ でも、くつろいでないと。何もない感じが大事。
 - ・ 白いご飯だけではものたりない。おかずで多様性を。新鮮で、なんでもないものを。
 - ・ しかし、美味しい水と空気でしっかり炊けたご飯。
-
- ・ 稱名寺、浄土寺浄土堂を参照した。春分秋分に光が奥まで射し込む。ここでは上からの光とした。

- ・ 鐘の音をいい音で響かせたい。漆喰の壁、平面ではなく膨らんで、音環境としてよい。
 - ・ 屋根近くの空気を床下へ導入している。床下土間コンの上にながり入りの土 200 ミリ。
 - ・ 壁を熱くして熱容量を大きくして、家の内部温度が平均化して、扇風機で大丈夫。
 - ・ 太陽光は空間を活性化する。
 - ・ エネルギーの事いつも考える。地熱、上からの光。エアコンをあまりつかわない。
 - ・ 安藤さんたちとエローラ、アジャンタなど石窟寺院見て廻った。暗い石窟寺院の奥まで太陽光が射し込むなど。
 - ・ 土佐派の家は移築可能。
- ・ 土佐では台風、豪雨に耐える、という大きな自然の前提条件があるので、設計が楽なのかもしれない・・・。選択の余地がないから・・・。
 - ・ 他の三県は比較的楽天的にできるはず。といいつつ逆にそこで価値のあるものを生み出すのは大変なこと。香川はさらに難しい。風情を問われる。
- ・ 質問:先生の昔の文章、よく覚えてないが、昆虫のような生命的な建築と、殻を持たず、広がっていく建築?という二つの方向性を示されていたが・・・

20世紀後半の建築のために 無の建築—序論—

片寄った見方をしなければ、生物界に於ける高等動物として、人間と、もう一つ昆虫を考えることができるのである。後者は生物が環境に適応する力としての「本能」が最も発達した種であり、前者は「知性」がその有力な武器となる。昆虫が発生のとき既に、その一生の生活方式について、微細にわたって計画された能力を所有して生まれて来るのに対して、生まれたばかりの人間は、十分に自律する能力を持たず、それが後天的に体得され、知性がみがかれる。つまり人間は、かなり融通無碍な白紙の状態で、一後からつけ加えられるものを受け入れるに充分な本質的条件をそなえて生まれて来る。

今このことを頭において建築を考えてみると、建築の存在価値は、我々の欲望を持った生活の容器であり、我々の創造活動の一つの「場」である。その意味で建築は、生物が環境に適当するもののみが繁栄するように、個人及び社会の要求体系とも云うべきものに適応し、未来に大きく可能性を開くものが発展し、そうでないものはほろびてゆく。

ここで、この適応の仕方には、先程生物の世界で暗示されたように、二つの方向が考えられる。ライトの建築は昆虫のやり方である。「1958年 アメリカ中央平原に於ける、Mr.F氏の住宅はこれだ」というふうに決定される。気候、材料、機能、生活が厳密に検討され、一つのぎりぎりの形態がインテリアの細部にまで至る。これは確かに、だまっていられないような有機的な力を持っている。

だが、それはそれとして、有機的な建築のやり方についてのもう一つの非常に魅力ある観念が考えられる。これをここで、はっきりまとめてみたいと思う。

この観念にもとづく建築は、使い方に対する機能の上でも、造形意図の上でも、特定のものを旨ざしていない。融通無碍な形で表われる。これは無論、無関心ということとも、そういう問題を第一義的に扱わないということとも違う。自由な使い方のための、また自由で創造的な人間精神のための、さまざまな可能性を包含した、最も基本的な骨格と、「無表情」な姿で表わされる。

先づ、狭義の機能について考えると、—ミース・ファン・デル・ローエは、ユニバーサルスペースを提案して、建築の社会的耐用年限が、建築物のそれに比してますます短くなるという。そしてコントラストアクションの方式が、第一に取り上げられるようになった。しかし、どんどん変わって行く生活内容や使い方の中に、もしも変らない、恒常的な性格—或る人間生活の法則性—が見つけ出されるとすれば、ユニバーサルなスペースへの生活学的アプローチは可能になる。例えば、人間の生活は大きく活動部分と、休養部分に分れること、或は我々には必ずプライベートなものと社会的なものに対する相矛盾する二つの欲求があること、目の高さは155cmである、とかいうような法則性である。これを通して、肝心のところを通る動線と、パイピングに導かれて開ける空間、機能の上でも、大きさの上でも、可変性のある空間、そういうものを考えることができる。

次にこの「第二の有機的建築」は、様々な造形意志や、生活感情に対しても、大きな包容

力と、多様性を示すものでなければならぬ。一つの造形感覚で貫かれた空間に、我々は長く居るといことは退屈である。岡本太郎の云うように、建築は一人の人間が、家具、調度に至るまでデザインしてしまおうとすべきものでなく、様々な精神が相競い、隣り合って、共存できるような場をつくらなければならない。人間を完全に満してしまふような、完全な一つの精神秩序というものは、無論観念の上でしか存在しない。キリスト教でさえもルネッサンスとともに、窓を開けて、風を入れる必要が出て来た。余り住み方を規定してしまう建築は、自由な人間にとって、全き空間とは云えない。「第二の有機的建築」は無表情でなければならない。能面のような、可能性を含んだ「無」が、計画されねばならない。「無の秩序」を持った建築の主張である。

第三の問題は、自然的条件に対処しての、架構と生産方式の問題である。これは既に一歩がふみ出されている。モジュール、プレファブの問題があるが、住む空間を造るという作業が、やがて本論で試みられるように、もついろいろな角度から、追求され分析されて、基本的な原理に、還元され、再構成されなければならない。何も柱を建てて、重いものを載せるというやり方だけが、我々の空間獲得の唯一の方法ではないのだから。

以上、三点から示唆された建築の観念は、確かに、ライトの建築に象徴される観念とは対蹠的な一つの明確な方向である。この「無の建築」の観念が、20世紀後半の建築活動の大きな方向であることは、社会的にも、生産技術的にも、精神的にも必然であると思われる。(1958.6.25)

(先生の学生時代 (22 歳) の文章でした。JIA25 年賞を受賞されたときの資料でした。)

→学生時代にライトとミースについて書いたもの。決め切ってしまうライトと、ユニバーサ

ルな建築のあり方、システムを提示するミースの思想。自分はミースに共感する。しかし、一輪の花を活けるにもセンスが必要で……。結局自分はずいついやりすぎてしまっていると思う。

・ 質問：代表作をひとつだけ選ぶとしたら何ですか？

→自分で選ぶものではない（笑・・・）

- ・ 十市の木造県営住宅は・・・遮音など、技術力もあるが不十分な面がある。
- ・ 稱名寺は誰でもできる。（??）
- ・ 中芸高校格技場は、いろいろなことがわかった人でないとできない。微妙なバランスの上で成立している。

・ 質問：三井所先生は、徳島で建築するのにイタリア語や標準語でしゃべる必要はない、方言の建築をとおっしゃられる。方言の建築と言えば「土佐派」の建築が真っ先に浮かぶが、先生からみて他の地方の建築で思い当たるものはありますか？

→よそのことはよくわからない・・・

- ・ 「地域性」に拘泥する必要はない。
- ・ 骨董のように、「手放したくない」と思ってもらえる建築を。

懇親会

130223 浪漫亭

・ 質問：一番好きな建築は？

→高知県立郷土文化会館（現文学館）はわるくない。

（足元の処理がよくない。小学生のときよく前を歩いて建築に興味わいたなどの声・・・）

- ・ ライト、モリスギフトショップの外観だけで「テゴにあわん」と思った。
- ・ 長水さんはよく食べ、よく飲まれる。お寿司もあてに・・・（笑

見学会

130224 かたつむり山荘

- ・ かたつむり山荘の化粧野地、両耳付の 40 ミリの面皮厚板+目板+スタイロ 40 ミリ+杉の五部板、銅板葺き。
- ・ 丸太は彼岸までに伐れば、皮は比較的簡単にむける。
- ・ ストープの煙突はいきなり横に抜かず、一度上に上げないと着火しにくい。
- ・ 極地にいたお父さんの経験から。
- ・ 移築の際にレンガ積みの輻射壁の中に煙道のダンパーをつくったが浅智恵だった・・・。

- ・ 質問：柱の心を逃げて梁を相欠きにして組んでいく手法は、複雑な仕口が不要の、普遍的構法に発展してく可能性のある架構だったのでは？
→丸太同士をひかって組むことの難儀さをイメージできてなかった。大変な作業。これはここ一回きりです。
- ・ 床梁も軒桁も全て一本モノで、架ける材を渡って長く出すことを考えていくうち、この構法にたどりついた。柱心と梁心を 150 ずらすことで成立。ある意味で必然の構造。
- ・ 図面を描く弟子が「描けない」というので、割り箸を荷札の細い針金でくくってモデルを作った。そこに来た上田さんが「軒をもっと出したほうがいい」というのでこの形になった。
- ・ 入母屋の家で坪あたり 13 人工、土佐派の家で 5～7 人工。
- ・ 木製のソファ、とても座りごちがいい。
→お父さんのデザイン。座面を標準よりも深くしたのがよかった。
- ・ かたつむり山荘ではお話に何回も「おやじが」、「おやじの」、と、長水さんのお父さんへの敬愛が随所に感じられました。